



平成 25 年度
福島県教職員特選研究論文集



福島県教育委員会

はじめに

本研究論文の募集は、教職員の自主的な研究を奨励し、効果的な実践や先進的な取組を研究論文としてまとめることを通して研修意欲や専門性を高め、教職員個々の資質の向上を図ることを目的として実施しているものであり、昭和46年度の第1回から本年度で42回を数えます。その長い歴史の中で、数多くの教職員がその時代を反映した様々な教育課題に真正面から取り組み、貴重な成果を発表してこられました。

残念ながら平成23年度は東日本大震災及び原発事故により、募集を行いませんでしたが、平成24年度から募集を再開し、平成25年度は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、特別支援教育、幼稚園教育、学習指導法など、様々な領域にわたる論文が36点寄せられました。ここに収められた論文は、これらの中から、慎重な審査を経て特選に選ばれたものであります。

福島県は今、未曾有の災害から、復旧・復興に向けて県民一丸となって邁進しているところであります。「何より重要なのは人づくりである」ことを再確認し、未来の福島県を支える人材の育成に向け、日々の学校教育で児童生徒に「生き抜く力」を育てていかなければなりません。

このような中であって、いずれの研究もそれぞれの学校、学級及び教科等の課題を的確にとらえながら、指導方法・内容の質的改善を図った優れた実践研究として高い評価を得たものであり、各学校が抱える学習指導上の様々な課題の解決へ向け、具体的な示唆を与えるものであります。各学校におかれましては、これらの研究成果を参考として実践、研究をさらに深められ、今後の本県学校教育の充実・改善に大いに役立てていただきたいと思います。

最後になりますが、応募されました皆様の御努力に心から敬意を表しますとともに、本県教職員の研究・研修意欲がさらに高まり、結果として、児童生徒の学力向上、豊かな心の育成、健やかな体づくりにつながり、「生き抜く力」の育成に結びついていくことを期待いたします。

平成26年3月

福島県教育庁義務教育課長

飯村新市

目 次

はじめに

平成25年度福島県教職員研究論文入賞者一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

特選研究論文

○ 国 語

読む力を高める指導の工夫

～「比べ読み」の授業を通して～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

二本松市立石井小学校 教諭 菅野 智香子

○ 算 数

数学的な考え方を高め表現力を育てる学習指導のあり方

～少人数指導のよさを生かして～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

矢祭町立内川小学校 代表 大河原 久宗

○ 技術・家庭

社会の変化に対応し、豊かな心と生活を創造する能力の育成

～東日本大震災後、そして1年・2年…生徒達の学びと実践～・・・・・・ 10

伊達市立桃陵中学校 教諭 遠藤 範子

○ 総合的な学習の時間

ふるさとを想い、自ら学び続ける子どもをめざして

～「地域に根ざした学習対象との出会い」と「連続的な思考」を大切にした

総合的な学習の時間を通して～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

郡山市立湖南小中学校 教諭 吉田 明史

○ 特別活動

望ましい集団活動を通してのよりよい生活づくり

～SPDCAサイクルによる特別活動の充実～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

田村市立美山小学校 教諭 齋藤 孝之

審査の観点及び審査総評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

◇ 平成25年度福島県教職員研究論文応募状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

◇ 平成25年度福島県教職員研究論文応募者一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

おわりに

平成25年度 福島県教職員研究論文入賞者一覧

【特選】

領域等	個人 団体	学 校 名	職 名 ・ 氏 名	研 究 主 題
国語科	個人	二本松市立石井小学校	教諭 菅野智香子	読む力を高める指導の工夫～「比べ読み」の授業を通して～
総合的な学習 の時間	個人	郡山市立湖南小中学校	教諭 吉田 明史	ふるさとを想い、自ら学び続ける子どもをめざして～「地域に根ざした学習対象との出会い」と「連続的な思考」を大切にしたい総合的な学習の時間を通して～
特別活動	個人	田村市立美山小学校	教諭 齋藤 孝之	望ましい集団活動を通してのよりよい生活づくり～SPDCAサイクルによる特別活動の充実～
技術・家庭	個人	伊達市立桃陵中学校	教諭 遠藤 範子	社会の変化に対応し、豊かな心と生活を創造する能力の育成～東日本大震災後、そして1年・2年…生徒達の学びと実践～
算数科	団体	矢祭町立内川小学校	(代表) 校長 大河原 久宗	数学的な考え方を高め表現力を育てる学習指導のあり方～少人数指導のよさを生かして～

【入選】

領域等	個人 団体	学 校 名	職 名 ・ 氏 名	研 究 主 題
算数科	団体	棚倉町立棚倉小学校	(代表) 校長 木村 敏夫	活用力を育てる学習指導～基礎・基本の定着の上に～算数科：活用を促すための教師の支援の工夫
算数科	団体	只見町立朝日小学校	(代表) 校長 荒川 文雄	学ぶ力を身につけ、ともに高め合う子どもの育成～基礎・基本の定着と活用のバランスよい授業をとおして～
総合的な学習 の時間	個人	相馬市立桜丘小学校	教諭 増子 啓信	福島のこれからの生きる力の素地を養う放射線教育の在り方を探る～総合的な学習の時間「わたしたちの故郷、相馬は今…」の実践を通して～
算数科	団体	只見町立只見小学校	(代表) 校長 二瓶 悦子	自ら学び、ともに考えを深め合う児童の育成～学び合いを生かして学習の定着を図る工夫～
学習指導	団体	天栄村立天栄中学校	(代表) 校長 庄司 新一	自ら学び確かな学力を育むための学習活動の創造（2年次）～個に応じた指導の工夫を通して～
特別支援教育	グ ル ー プ	福島県立豊学校	(代表) 教諭 齋藤 成子 他4名	豊学校におけるセンター的機能充実のための実践とこれからの展望～関係機関との連携を大切にしたい地域支援センター「みみらんど・郡山」の取組～
算数科	団体	矢祭町立東館小学校	(代表) 校長 吉田 和賀子	数学的な思考力・表現力を育てる指導の工夫～算数的活動による学び合いを通して～

【奨励賞】

領域等	個人 団体	学 校 名	職 名 ・ 氏 名	研 究 主 題
特別支援教育	個人	南会津町立館岩小学校	教諭 河原田 三春	特別支援学級における、表現する喜びをはぐくむ教育活動の実践～交流やふれあいを生かした深まり・広がりを求める活動を通して～
算数科	個人	福島市立鳥川小学校	教諭 柳澤 香里	学んだ実感の味わえる算数科の授業はどうあればよいか

研究主題

読む力を高める指導の工夫 ～「比べ読み」の授業を通して～

二本松市立石井小学校 教諭 菅野智香子



1 主題設定の理由

(1) 今日的な課題から

小学校学習指導要領解説国語編では、第5学年および第6学年「C読むこと」の指導事項として、「イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。」「カ 目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと。」とある。一編の文章で課題を解決するのではなく、多様な読み方の中から、目的に応じて読み方を選択し、活用することが明記された。

複数の文章や作品を読み比べる「比べ読み」は、様々な観点から文章や作品を評価する力を養うことができ、「読む力」を高めるのに有効な言語活動であるといえる。

(2) 本学級の児童の実態から

第6学年30名を昨年度から持ち上がりで担任している。

第5学年4月の国語科の学力テスト（NRT）では、各領域で正答率が全国比を上まわっていた。しかし、6月に実施した定着確認シートの結果では、本学級の正答率がサンプル校よりも低かった。いくつかの選択肢の中から自分の考えに近いものを選ぶことはできても、長文を読みこなし、自分の考えを自分の言葉で書き表すまでには至っていないことが明らかになった。

そこで、本研究では、児童の読む力を高めるために、複数教材の「比べ読み」の授業を実践し、複数の作品や文章から表現の工夫や書き手の意図をとらえることを通して、児童の考えを深め、読む力を高めていきたいと考える。

2 研究仮説

国語科の「読むこと」の学習において、学習過程の中に複数教材の比べ読みの学習を設定し、ア)「比べる視点」に沿って読み、イ)「書き手の意図を考える活動を取り入れれば、児童の読む力を高めることができるだろう。

(1) 研究仮説の考え方

【複数教材の比べ読みの学習】とは

単一教材だけではなく、他作品を並行して読み、

複数の作品の共通点や相違点から、書き手の意図を読み取る学習である。複数教材で単元を構成することで、読む活動に振幅性が生まれ、より深く作品を理解できるようになると考える。比べ読みの学習は、以下の二つの活動を核として進めることとする。

ア) 「比べる視点」に沿って読む活動

複数教材の何を比べさせるのかを明確にし、それに沿った読む活動を展開する。

イ) 「書き手の意図」を考える活動

複数の教材から書き手の意図を読み取り、それに対する自分の考えを言葉で表現する活動を設定する。

【児童の読む力を高める】とは

本研究では、複数教材の比べ読みを通して、児童の思考力を育てることをねらいとする。「比較する」という活動自体が児童の思考をうながす活動である。考えるための情報を増やし、視点に沿って整理し、言葉で表現させることで、児童はより主体的に作品と関わり、思考を深めることができるであろう。よって、本研究の「読む力を高める」とは、内容を正確に読み取るだけでなく、書き手に対する自分の考えをもち、作品を評価する姿をとらえることとする。

(2) 仮説に基づく指導法

単元の中で、複数教材をどのような部分で、どのような視点で活用するのかを先行研究（山下2008）をもとに実践することとする。

〈指導計画の累型〉

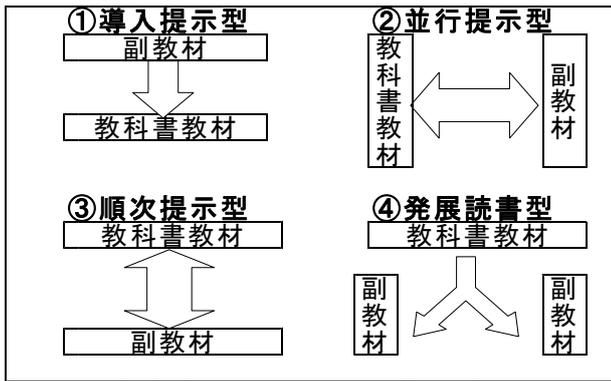
複数教材を活用した比べ読みの指導法は、

- ①導入提示型 ②並行提示型
- ③順次提示型 ④発展読書型

に分けられる。

複数教材の学習に比べ読みの活動を取り入れることで、教材それぞれの内容や構成及び表現方法の工夫などがとらえやすくなる。特に、順次提示型は、教科書教材の読み取りで学習したことを生かして、文章構成や表現の特長を児童自らが主体的に読み取っていくことができるといった利点があり、複数教材を使った学習経験が少ない児童には

適した指導計画と言える。



複数教材を取り入れた指導計画

〈副教材選択の視点〉

副教材の選択においては、どのような事柄について教科書教材と副教材を比べるのか、どのような事柄を教科書教材から副教材へ広げるのかという「読みの視点」を明確にしておく必要がある。

この「読みの視点」は、副教材選択の視点であるとともに、児童が教材を読み取る視点にもなる。

説明的文章	文学的文章
筆者の意見・主張 要旨 論の構成 具体例 結論 表現 時代	作者の意図 主題場面の構成 登場人物の心情や行動 人物の変容 情景 描写 しかけ 時代

比べ読みの視点

3 研究計画

(1) 研究内容

「複数教材による比べ読み」の授業実践と考察

(2) 研究対象

研究時期を平成24年4月（第5学年）～平成25年7月（第6学年）とし、男女30名を対象に検証授業を実施する。

(3) 検証方法

複数教材の比べ読みの学習における、「比べる視点」に沿って読む活動、「書き手の意図」を考える活動が、児童の読む力を高めるために有効であったかを以下の方法で検証する。

- ① 「初読における読みの変容」の分析
- ② 「定着確認シート」の分析

4 研究の実際

(1) 検証授業1 物語文「注文の多い料理店」

本単元では、教科書教材「注文の多い料理店」読み取り後、「なめとこ山の熊」の比べ読みを行う順次提示型で進めた。「なめとこ山の熊」は、かなり長文であり、難解な言葉も使われているため、個人での読み取りは難しい。意図的なグループを編成し

友達と話し合いながら考えを書かせた。

具体的な手立てと授業の実際

ア) 「比べる視点」に沿って読む活動

〈比べる視点をもとに小グループで話し合いをする〉

小グループを組み、比べる視点を「中心人物の人物像」にしぼって話し合いをさせた。児童にとって、初めての比べ読みだったので、「比べる視点」は教師から提示し、2つの作品の相違点を物語に沿って書き込めるようにした。

イ) 「書き手の意図」を考える活動

〈相違点から全体で教科書教材の主題を考える〉

全体での話し合いの場で「結末」について対比させた。「自分勝手な紳士がもとの都会へ帰って行く」と「心優しい小十郎が命を落としてしまう」という結末を比べ、どちらが幸せか自分の考えをもたせた。2つの結末を比較することで、作品の主題を多面的に考えさせることができた。

次単元への課題

- 2つの作品の「相違点」を見つけることはできても、「共通点」を見つけることは難しい。次単元では、同一作者のテーマの「共通点」に着目させて、より深い読みにつなげることとする。

(2) 検証授業2 説明文「森林のおくりもの」

本単元は、教科書教材「森林のおくりもの」を学習した後、筆者の主張に迫るために、同じ筆者の作品（シリーズ5作品）を副教材として読む順次提示型で比べ読みを実践した。教科書教材から読み取ったことをもとに、森林から自然全体へ目を向けて、知識や考えを広げていく学習を設定した。

具体的な手立てと授業の実際

ア) 「比べる視点」に沿って読む活動

〈それぞれの資料の「共通点」を見つける〉

副教材の5冊の中から「自然のおくりもの」が書かれている章を抜粋して提示し、それぞれの資料の「共通点＝自然のおくりもの」を見つけ、分類させた。視点を「共通点」にしたことで、筆者の主張がより明確になった。



イ) 「書き手の意図」を考える活動

〈筆者の主張をまとめ、単一教材の要旨と比べる〉

単元の最後に、筆者がこれらの作品を通してどんなことを読者に伝えたかったのかということについて意見文を書いた。

複数の資料の要旨を総合して筆者の主張を考えさせることで、客観的に作品をとらえることができ、読みの深まりを実感させることができた。

次單元への課題

- 主体的な読みにつなげるために、児童自身が「比べ読みの視点」を設定できるようにする。

(3) 検証授業 3 物語文「大造じいさんとがん」

本単元は、順次提示型の単元構成を設定し、教科書教材をじっくり味わってから、副教材「片耳の大鹿」を提示することとした。前単元での「共通点を見いだす力」を生かし、本単元では、二つの作品の「比べ読みの視点」を児童の話し合いで決定した。

また、終末に椋鳩十の作品を読む活動を設定し、「主題」を考えながら物語を読み味わわせた。よって、順次提示型＋発展読書型で進めることとした。

具体的な手立てと授業の実際

7) 「比べる視点」に沿って読む活動

〈話し合いの中から「読みの視点」をもたせる〉

「大造じいさんとがん」と「片耳の大鹿」の読みの視点について話し合わせたところ、検証授業1と2の学習が生きてはたらき、「物語文を読む視点」を自分で設定できた児童が多かった。その視点は、「中心人物の気持ちの変化」であり、それを読み解くことが作者の意図を考えることにつながるということに気付いた。視点を自ら設定することで、主体的に作品と関わる児童が増えた。

1) 「書き手の意図」を考える活動

〈主題を考えながら他の作品を読み広げる〉

目的をもった読書活動へ広げるために、単元の終末に、椋鳩十の他の作品を読んで主題をまとめる活動を取り入れた。

物語文の何を読めばいいのか、どこがおもしろいのかという「読み方」を身につけた児童は、作者が伝えたいことを意識しながら、共感的に読み進めることができていた。

大造じいさんとがん	やねうらのねこ	二羽のわし	じねすみの親子	山のぬし	ゾウのたまご	作品名	感想
						大造じいさん	あらすじ
大造じいさんは、片耳の大鹿を飼っていた。大造じいさんは、片耳の大鹿を飼っていた。大造じいさんは、片耳の大鹿を飼っていた。	やねうらのねこは、二羽のわしを飼っていた。やねうらのねこは、二羽のわしを飼っていた。やねうらのねこは、二羽のわしを飼っていた。	二羽のわしは、じねすみの親子を飼っていた。二羽のわしは、じねすみの親子を飼っていた。二羽のわしは、じねすみの親子を飼っていた。	じねすみの親子は、山のぬしを飼っていた。じねすみの親子は、山のぬしを飼っていた。じねすみの親子は、山のぬしを飼っていた。	山のぬしは、ゾウのたまごを飼っていた。山のぬしは、ゾウのたまごを飼っていた。山のぬしは、ゾウのたまごを飼っていた。	ゾウのたまごは、大造じいさんとがんを飼っていた。ゾウのたまごは、大造じいさんとがんを飼っていた。ゾウのたまごは、大造じいさんとがんを飼っていた。	大造じいさんとがん	あらすじ
大造じいさんは、片耳の大鹿を飼っていた。大造じいさんは、片耳の大鹿を飼っていた。大造じいさんは、片耳の大鹿を飼っていた。	やねうらのねこは、二羽のわしを飼っていた。やねうらのねこは、二羽のわしを飼っていた。やねうらのねこは、二羽のわしを飼っていた。	二羽のわしは、じねすみの親子を飼っていた。二羽のわしは、じねすみの親子を飼っていた。二羽のわしは、じねすみの親子を飼っていた。	じねすみの親子は、山のぬしを飼っていた。じねすみの親子は、山のぬしを飼っていた。じねすみの親子は、山のぬしを飼っていた。	山のぬしは、ゾウのたまごを飼っていた。山のぬしは、ゾウのたまごを飼っていた。山のぬしは、ゾウのたまごを飼っていた。	ゾウのたまごは、大造じいさんとがんを飼っていた。ゾウのたまごは、大造じいさんとがんを飼っていた。ゾウのたまごは、大造じいさんとがんを飼っていた。	大造じいさんとがん	あらすじ

次單元への課題

- 児童は、これまでの物語文の比べ読みを通して「中心人物の心情の変化に着目することで作者の意図に迫る」という読み方を学習してきた。6学年における物語文の学習では、それ以外の読みの視点を提示し、さらに多面的・客観的な読みのスキルを体得させていく。

(4) 検証授業 4 物語文「ばらの谷」

本教材は、文学的な知識や経験が乏しい児童にはやや難易度の高い作品であり、この教材だけで作者の意図や書きぶりの特徴に深く迫ることは難しいと考えた。よって、並行提示型の学習過程を構成し、単元の最初から同一作者の作品「ワハムとメセト～双子の国の物語～」を副教材として提示した。

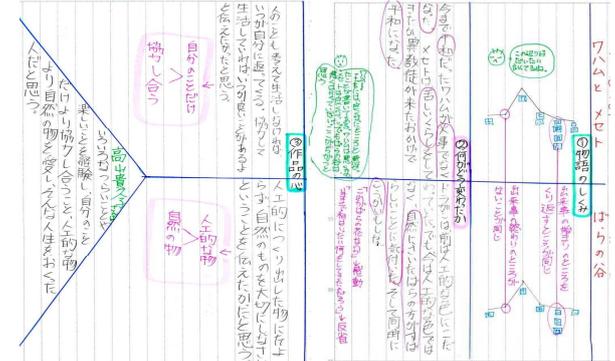
具体的な手立てと授業の実際

7) 「比べる視点」に沿って読む活動

〈「作品の構造」を視点に作者にせまる〉

本単元では、読み取りの新たな視点として、「作品の構造」を取り上げ、構造曲線を使って作品のしかけに着目させる学習過程とした。

児童は、構造曲線から、どちらの作品も「出来事の繰り返しの後に中心人物の気持ちが一変し、そのヒントは、最初の場面にある」ことに気づいた。二つの作品の構造の共通項に視点をおき、作者像を推論することで、より論理的に、より客観的に、思考を働かせて作品を読むことができた。



1) 「書き手の意図」を考える活動

〈表現の仕方を工夫して、作者の意図をパンフレットにまとめる〉

単元の最後に、2つの作品の比べ読みから考えた作者の意図をパンフレットにまとめて読み合うという活動を設定した。児童は、これまでの自分の読みをふり返り、新たな気づきや修正を加え、自分の考えを再考しながら書きまとめていた。

読みの視点は児童自身で設定させたため、既習の読みが生かされていることが分かる。

次單元への課題

- これまでは、同一作者の作品を副教材として選定してきたが、さらに児童の読む力を高めるために、「書き手が異なる同一テーマの作品」の比べ読みの学習を設定することとした。

(5) 検証授業 5 説明文「イースター島にはなぜ森林がないのか」

本単元では、教材文「イースター島にはなぜ森林がないのか」の読み取り後、書き手が異なる同一テーマの作品から、自分に必要な部分を選んで論述できるような活動を取り入れることとした。よって、

順次提示型とし、教材文の他に、副教材として、「マンモス絶滅のなぞ（前教科書教材）」「森林のおくりもの（5学年教材）」の二つを提示した。これらの作品は、それぞれ自然や環境がテーマで、歴史に学び未来に生かすという観点で共通点がある。

具体的な手立てと授業の実際

7) 「比べる視点」に沿って読む活動

〈論の妥当性」「筆者の主張」を比べる〉

「論の立て方の妥当性」と「筆者の主張」を読み、その視点として、3つの副教材の一人調べを行った。その後、それぞれの筆者の主張に対する自分の立場を明確にさせた。

書かれている内容と自分の考えを比べながら読むことで、自ずと読みの主体は児童自身になり、より客観的に筆者の書きぶりを評価しようとする態度が育った。

8) 「書き手の意図」を考える活動

〈筆者の主張を引用して意見文を書く〉

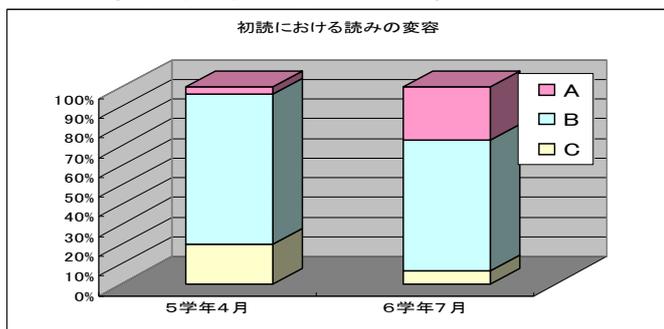
単元の終末に、「未来の環境を考えよう」というテーマで意見文を書き、自分の意見に説得力をもたせるために、3つの教材文から必要な文章を選んで引用する活動を位置づけた。

筆者の異なる2つの作品の比べ読みによって、1つの作品だけでは分からないことも、比べて読むことでその違いが分かり、必要な言葉を選ぶことで児童自身の考えを深めることにつながった。

5 検証結果とその分析

(1) 「初読における読みの変容」の分析

児童にどの程度読む力・書く力が身についたのかを検証するために、「初読の感想」に評価規準を設けて評価し、初読における読みの変容を累積した。結果は次の通りである。



第5学年4月時と比べて、第6学年7月時には、C評価の児童の割合が半分以下になり、逆にA評価の児童の割合が増えている。また、確実にC→Bとなった児童が4名、B→Aとなった児童が7名いる。初読の段階でも書き手の意図に迫る読みができる児童（A評価）、文章の読み方を理解できた児童（B評価）が増え、学級としての読みの力が高まったと言える。

(2) 「定着確認シート」の分析

定期的に定着確認シートを実施し、「読むこと」「書くこと」の2観点においてその正答率をサンプル校と比較した調査結果を見ると、第5学年1学期は本学級の正答率がサンプル校より低いことが多かったが、2学期にはいずれもサンプル校を上回っている。注目すべきは第5学年第3回の「読むこと」領域と、第4回の「書くこと」領域、第6学年第2回「読むこと」領域の結果である。サンプル校における正答率が低い場合でも、本学級の正答率にはさほど落ち込みは見られない。

多くの作品に触れることで文章を読むことに慣れ、比べ読みをすることで文章の読み方が分かってきた児童が多いことが分かる。

〈定着確認シート正答率の比較（読むこと）〉

	第5学年				第6学年	
	1回	2回	3回	4回	1回	2回
サンプル校	62.7%	86.4%	58.7%	77.2%		57.3%
本校	59.9%	82.1%	74.3%	79.7%		70.2%
差	- 2.8	- 4.3	+ 15.6	+ 2.5		+ 12.9

〈定着確認シート正答率の比較（書くこと）〉

	第5学年				第6学年	
	1回	2回	3回	4回	1回	2回
サンプル校	56.9%	71.0%	69.2%	46.4%	72.6%	72.1%
本校	55.0%	75.2%	72.6%	69.8%	72.7%	72.1%
差	- 1.9	+ 4.2	+ 3.4	+ 23.4	+ 0.3	+ 0

6 研究のまとめ

〈成果〉

- 「読みの視点」に沿った比べ読みをすることにより、作品の構造や表現などの特長を単一教材の学習よりも理解できるようになったり、作品を客観的に評価できるようになったりする等、児童の読みは深まり、読む力を高めることができた。
- 書き手の意図を考える活動を取り入れることにより、複数の作品を類比的にとらえ自分の考えを広げたり、書き手の意図と自分の考えを関連付けて読み取ったり等、児童の思考は深まり、それが読む力の向上につながった。

〈課題〉

- 一人読みに時間をかけすぎず、友達との学び合いで多様な意見を話し合いながら思考を深められるような学習過程を工夫したい。
- 限られた時数で効果的な指導をするための、年間を見通した比べ読みの計画を確立したい。

研究主題

数学的な考え方を高め表現力を育てる学習

指導のあり方～少人数指導のよさを生かして～

東白川郡矢祭町立内川小学校



I 研究主題設定の理由

1 今日の課題から

知識基盤社会の時代と言われる現在、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」の育成が求められている。学習指導要領では、児童に「生きる力」をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い個性を生かす教育の充実に努めなければならないとしている。

また、算数科においては、算数的活動を充実し、数量や図形について実感的に理解し、豊かな感性を育てながら、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付け、数学的な思考力・表現力を育て、学ぶ意欲を高めることが求められている。

2 学校教育目標の具現化から

本校では、次の教育目標を掲げ、実践に取り組んでいる。

～生き生きとした内川の子ども～

- 進んで学び、よく考える子ども
 - ・話をよく聞き自分の考えをもつ姿
 - ・自ら学び考える姿
- 思いやりのある、やさしい子ども
 - ・自分や友達のよさを認め合う姿
- 元気で、たくましい子ども
 - ・最後まで粘り強く学習に取り組む姿

特に「進んで学び、よく考える子ども」を育てていくためには、少人数のよさを生かしながら、数学的な思考力・表現力といった算数科で育成される力を養うことも重要である。

3 これまでの研究の取組と児童の実態から

平成21年度より、本校では中山間地域連携事業を受け、テレビ会議システムを活用したライブ授業・交流授業に取り組んできた。算数科においても、校内の授業だけでなく、テレビ会議システムを活用した交流学習を通して、他校の友だちの多様な考えに触れることで児童の学習意欲が徐々に高まってきた。

しかしながら、学習の状況を見てみると、次のような姿が見られる。

- 計算の技能は身に付いてきているが、計算の意味の理解が不十分で、文章問題等において正しい演算を決定する力が十分身に付いていない。
- 新しい問題に出会ったときに、既習事項をもとに課題を解決する力が身に付いているとは言い難い。
- 根拠をもとに自分の考えを書いたり説明したりする力が十分身に付いていない。
- 少人数だが、個人差が大きい。また、少人数のため多様な考えが出にくい。

以上のような実態から、少人数のよさを生かした指導を工夫することで、児童の数学的な思考力・表現力を育てていく必要があると考えた。

II 研究主題のとらえ方

1 「数学的な考え方」とは

本校で特に重点を当てて指導する「数学的な考え方」は、片桐重男氏が分類している次のものである。

(1) 数学的な態度

- ① 自ら進んで自己の問題や目的・内容を明確に把握しようとする。
- ② 筋道の立った行動をしようとする。
- ③ 内容を簡潔明瞭に表現しようとする。
- ④ よりよいものを求めようとする。

(2) 数学の方法に関係した数学的な考え方

- ① 帰納的な考え方
- ② 類推的な考え方
- ③ 演繹的な考え方
- ④ 発展的な考え方

(3) 数学の内容に関係した数学的な考え方

- ① 集合の考え
- ② 単位の考え
- ③ 表現の考え
- ④ 操作の考え
- ⑤ アルゴリズムの考え
- ⑥ 概括的把握の考え
- ⑦ 基本的性質の考え
- ⑧ 関数の考え
- ⑨ 式についての考え

2 「表現力」とは

具体物や言葉、数、式、図、表、グラフなどを用いて自分の考えを説明することと考えた。

3 「少人数指導のよさを生かして」とは

児童の実態を的確に把握し、一人一人に応じた手立てを工夫することと考えた。

Ⅲ 研究仮説

算数科の授業において、児童にはぐくみたい数学的な考え方を明確にし、少人数指導のよさを生かした学習活動や表現力を育てる工夫をすれば、数学的な考え方を高め、表現力を育てることができるであろう。

1 研究内容

(1) 数学的な考え方や表現力を育てる授業づくり

- ① はぐくみたい数学的な考え方の明確化
- ② 問題提示の工夫
- ③ 自分の考えを明確化させるための工夫
- ④ 話し合い活動の工夫
- ⑤ まとめ方の工夫（ノート、算数日記）
- ⑥ 教材・教具の工夫と活用
- ⑦ 少人数指導方法の工夫

(2) 授業を支える日常の取組

- ① 基礎・基本の定着
 - ・ステップアップタイムの実施
 - ・定着確認シートの分析・活用
- ② 学習環境の充実
 - ・算数コーナーの整備
 - ・学び方の定着（ノートづくり）
- ③ 算数だよりでの研修

Ⅳ 研究の実際

1 数学的な考え方や表現力を育てる授業づくり

(1) はぐくみたい数学的な考え方の明確化

- ① 第1学年「あわせていくつふえるといくつ」
1位数どうしで繰り上がりのないたし算の計算において、和が4までの計算カードの並び方について見つけたきまりを和が5以上の場面にも当てはめる「類推的な考え方」、また、和が10以上の未習の計算についてもきまりを考える「発展的な考え方」、対応と変化のきまりに着目する「関数的な考え方」を本時ではぐくみたい数学的な考え方として授業を行った。児童は計算カードの並び方を見て自分たちできまりを見つけ、すべてのカードを順序よく並べることができた。



また、たして11になるという未習の計算についても並び方を考えることができ、関数的な見方の素地を養うことができた。

② 第3学年「わり算を考えよう」

文章題の解決に際して、「何を求める問題なの

か」、「求めた答えは適切なものになっているのか」という視点で答えを吟味する「概括的把握の考え」をはぐくみたい数学的な考え方として本時の授業を行った。児童は板書された問題文を視写することで、解決へのキーワードである「みんなが乗る」を把握することができた。また、自力解決の際に「あまり」をそのまま答えに出していいのか迷っている児童も見られたが、自分の出した答えが問題に対して適切かどうかを振り返ることができており、結果についての概括的な把握をすることができた。

(2) 問題提示の工夫

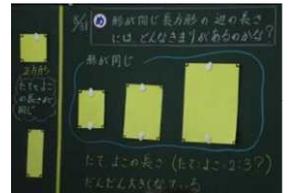
① 第2学年「分数 分けた大きさを表そう」

本時では、普段目にしない大きさや形の違う7種類の折り紙を準備することで大きさや形に関わらず、「四分の一」ができるのかという問いを引き出すことができ、自力解決への意欲を持たせることができた。



② 第6学年「比と比の値」

導入の段階で、身近にある長方形である「宿泊学習のしおり」、「学校だより」、「宿題プリント」、「七夕の短冊」と「折り紙」を提示することで、児童の学習に対する意欲が高まった。また、提示した図形を児童にグルーピングさせたことで、既習内容を振り返らせ、児童から問いを引き出すことができた。



さらに、まとめの段階で校長がゲストティーチャーとして登場し、導入の段階で提示したA判用紙から見られる「白銀比」について説明することで、児童が本時で求めた比が「白銀比」であったことや「白銀比」が日常生活にも多く活用されていることに気づき、最後まで意欲的に学習に取り組むことができた。

(3) 自分の考えを明確化させるための工夫

① 第1学年「あわせていくつふえるといくつ」

黒板に貼った計算カードの並び方と同じワークシートを配付し、カードを丸で囲んだり、線を引いたりして、考えを分かりやすくまとめることができ、話し合い活動の際も友だちとお互いにワークシートを見せ合いながら話すことができた。

② 第5学年「分数をもっと知ろう」

3人がそれぞれ自分の考えをホワイトボードに書くことで、自分の考えを説明しや



すくするとともに、友だちの考えとの違いに気づかせることができた。ホワイトボードは、用紙類よりも書きやすく、黒板に直接書くのとは違って移動して分類したり、後で振り返ったりすることもできた。

(4) 話し合い活動の工夫

① 第3学年「わり算を考えよう」

本時は、比較検討の話し合いの段階を重視したので、自力解決の段階で「あまり」の処理に悩む姿が見られたが、自力解決には時間をかけず、そのまま話し合いの段階に進んだ。結果の共有ではなく、過程を共有しながら、解くことができた。



② 第6学年「比と比の値」

児童の発言を引き出しながら、言葉や式を板書し、児童の考えを整理することができた。また、友だちの発表した内容を再話させたり、友だちの考えた式を読む活動をさせたりすることで、思考の共有化を図ることができた。

(5) まとめ方の工夫（ノート、算数日記等）

① 第2学年「分数 分けた大きさを表そう」

本時の流れが分かるワークシートを使用したことで、本時の学習を振り返り、まとめることができた。また、丸で囲むだけの簡単な自己評価も合わせて行うことができた。

② 第6学年「拡大図と縮図」

「体育館の実際の高さを縮図を使って求めよう」というめあてを振り返り、「縮図を使って」というキーワードを入れたまとめを児童が自ら考えて書くことができた。単元計画の中に毎時間の「本時のめあて」と「本時のまとめ」を入れ、めあてとまとめの整合性を図ることができるようにした。

また、ゲストティーチャーの校長が、江戸時代の数学書「塵劫記」の内容をもとに直角二等辺三角形の図形の性質を利用して実際の高さを求められることを説明した。そのことで、児童は身近な生活にも縮図が利用されていることや図形の性質を使えば簡単に実際の高さが求められることをとらえられた。



(6) 教材・教具の工夫と活用

○ 第6学年「拡大図と縮図」

手作りの「高さ分度器」は、目盛りが見やすく、糸を垂直にする工夫もなされており、正確

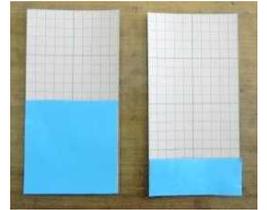


に角度を測れた。目の高さを測る器具も使いやすく効果的だった。

(7) 少人数指導の工夫

○ 第5学年「分数をもっと知ろう」

分数のたし算の式は、できたものの、分母を10にすることに気づけない児童が、あらかじめ準備しておいた平板模型図を用いて、分母が10になることを理解することができた。少人数を生かし、一人一人の実態を把握し、反応を予想して、個に応じた手立てを講じることができた。



2 授業を支える日常の取組

(1) 基礎・基本の定着

① ステップアップタイムの実施

金曜日の6校時目に当たる時間に、「ステップアップタイム」を全校で位置づけ、学級の実態に合わせて学習内容を復習したり、発展的な問題に取り組んだりして、基礎・基本の定着を図った。

② 定着確認シートの分析と活用

県教委作成の「定着確認シート」を授業内に実施し、その結果を目標値やサンプル校平均正答率と比較しながら、「上回った学習内容」、「下回った学習内容」、「平均正答率が低かった学習内容」について原因を明らかにし、その後の取組を具体的にするため独自の分析・考察シートを作成した。その分析・考察シートをもとに児童一人一人の実態に応じた学習内容や指導方法を検討し、実施している。

【サンプル校の平均正答率より下回った問題】

No.	問題内容	サンプル校	本校	効果的だった手立て	今後の取り組み
19	【対称の軸】 正方形の対称の軸が何本あるのか答える。	88.0	33.3	正答は4本だが、C児が2本と誤答していた。前問と同様で、基本的な図形の対称の軸について定着していないと思われる。	B児は正答していたが、学級全体での復習が必要と思われる。指導の仕方について反省するとともに、しっかりと定着を図れるように取り組む。

【サンプル校・本校共に平均正答率が低かった問題】

No.	問題内容	サンプル校	本校	効果的だった手立て	今後の取り組み
24	【縮尺】 5kmを20cmに縮めたときの縮尺を求める。	18.6	33.3	正答は25000分の1であるが、B児は2500分の1と答えており、計算ミスと思われる。C児は10000分の5と答えており、縮尺の理解とともに、分数の表し方についてもつまずいていると思われる。	縮尺の意味や表し方について復習させていく。特にC児については、分数の表し方も再確認する必要があるため、今後、個別指導を行っていく。

※ 下回ったり正答率が低かった問題に関しては誤答の原因を分析し、今後の手立てを記載する。

(2) 学習環境の充実

① 算数コーナーの整備

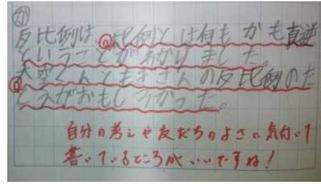
教室内に算数コーナーを設けることで、いつでも既習事項を振り返ることができるようにした。教室以外（廊下や校長



室)にも算数コーナーを設けることで、休み時間等、子どもたちが進んで算数的活動をしていた。

② 学び方の定着 (ノートづくり)

教科書に載っている「算数マイノートを作ろう」を一覧にまとめ、学習の記録をノートに分かりやすくまとめていけるようにした。また、「算数日記の書き方」を作成し、学習の振り返りができるようにした。



全校で、板書の約束を統一し、めあては(め)、自分の考えは(自)、まとめは(ま)などとし、継続して指導できるようにした。また、「話し合いの仕方」や「声のものさし」を作成し、深まりのある話し合い活動ができるようにした。

(3) 算数だよりでの研修

算数の学習で大切なことや新しく加わった内容、研究授業に関わる内容などを「算数だより」として校長が発行し、校内研修会で活用し、授業力の

きた。

- 児童の身近なものやあえていつも目にしているものとは違うものを提示するなど、問題提示の仕方を工夫することで、児童の学習意欲を高めることができた。
- 少人数指導の中で、説明するための方法や話し合い活動の仕方を工夫することで、表現力が徐々に高まってきた。また、友だちの考えを理解し、思考の共有化を図ることができるようになってきた。
- 単元計画の中に、めあてとまとめを明記したことや算数日記の継続、ゲストティーチャーの活用などにより、児童の学習意欲に高まりが見られ、めあてとまとめの整合性を図った授業が実践できた。
- 学習内容に合わせた教材・教具の作成により、算数的活動を十分に行うことができ、学習内容の理解につながった。

- 数学的な考え方をさらに高めるために、多様な言語活動を取り入れたり、学んだことを確かにするための習熟の場を充実させたりしていく必要がある。
- 適切な評価を行い、児童のよさや可能性をさらに伸ばしていく必要がある。

2 授業を支える日常の取組

- 算数コーナーの整備やノート作りや算数日記の書き方の指導や定着確認シートの分析などを全校で統一して進めることで、指導の効果を高めることができた。
- 算数の授業だけでなく、ステップアップタイムや家庭学習の継続が児童の学力の向上につながった。
- 学年の発達段階や個に応じた内容をさらに工夫し、見通しを持って計画的に進めていく必要がある。

一歩	算数だより 第2回授業研究会 2012.7.11 内川小学校・大河原久宗	『生きる力』 ☆ 確かな学力 ☆ 豊かな人間性 ☆ 健康・体力
-----------	-----------------------------------------------	------------------------------------------

算数的活動を通じた三角形の仲間分けの授業

◎ 小学校第3学年「三角形のなかまを調べよう」
※ 導入部分において新しい教材が用いられている

【円周上に12個の点を等間隔に打った図】

◎ 算数的活動を通して
下の図の円周上の点同士、もしくは円周上の点と中心点を結んで三角形を作る活動を行う。
この活動では点の選び方により、不等辺三角形(△)種類、二等辺三角形(△)種類、正三角形(△)種類を作り出すことができる。

<比較>
① 「三角形は3つの頂点からできている」ことの意識化を図ることができる。
② 点同士を結ぶことで正確な長さを示すことができる。
③ 長さが正確であることから、コンパスによる長さの確認をすることができる。【既習の内容を活用する場】

向上に役立てた。

【第3学年：C「図形」領域の「算数的活動」】

- 二等辺三角形や正三角形を定規とコンパスを用いて作図する活動】

V 研究の成果 (○) と今後の課題 (●)

1 数学的な考え方や表現力を育てる授業づくり

- 児童にはぐくみたい数学的な考え方を指導案に明確に示し、高めるための手立てとして話し合い活動やまとめ方や教材・教具などを工夫することで、徐々に数学的な考え方を高めることができて

VI おわりに

「授業」は、「子どもたち一人一人のかけがえのない学びの時間」であり、学校の生命である。

子どもたちは一人一人顔形が違うように、一人一人が違った思いや願いを持って学んでいる。少しでも分かるようになりたい、できるようになりたい、算数が使えるようになりたいと考えている。

どの子どもたちも生き生きと楽しく学び、子どもたちに自信を持たせてあげられるのは「授業」だと考え、これからも、残された課題をしっかりと捉え、「チーム内川」9名の職員の力を結集し、子どもたちの思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業づくりに、取り組んでいきたい。

研究主題

社会の変化に対応し、豊かな心と生活を創造する能力の育成

～東日本大震災後、そして1年・2年・・・生徒達の学びと実践～

伊達市立桃陵中学校 教諭 遠藤 範子



I 主題設定の理由

東日本大震災は、私達を絶望の底へ突き落としました。何不自由なく、食べ物や物資を購入できたことが、ライフラインの遮断により当たり前前の生活ができない初めての経験。そのことが家族や地域の人々との関わり、衣食住、消費や環境など家庭科教育の全ての内容に関わり、生徒の問題意識や学習意欲を高め、生活を創造する「生きる力」の育成につながるのではないかと考え本主題を設定した。

II 研究仮説

東日本大震災から学んだことを生かし、生活に役立つ物の製作と活用を通して、自分にできることを意識し実践することで、消費と環境に関する自らの課題を解決し、社会の変化に対応し、豊かな心と生活を創造する能力の育成が図られるであろう。

III 研究計画

- 1 研究期間 平成23年4月～平成25年7月
- 2 研究対象 伊達市立桃陵中学校 第3学年

IV 研究の実際

1 技術・家庭科3年間の授業構想

問題解決的な学習と実践的・体験的な学習を進めていく。一人一人の思いや願いを実現するために生活の問題に気づき、自らの課題を設定し解決する。



2 17時間の指導計画

問題意識を持たせるために、指導計画の中の消費と環境で考えられる課題例について話し合わせ、どちらか一方を選択させ、自己課題をつかませた。

3 生徒の実態

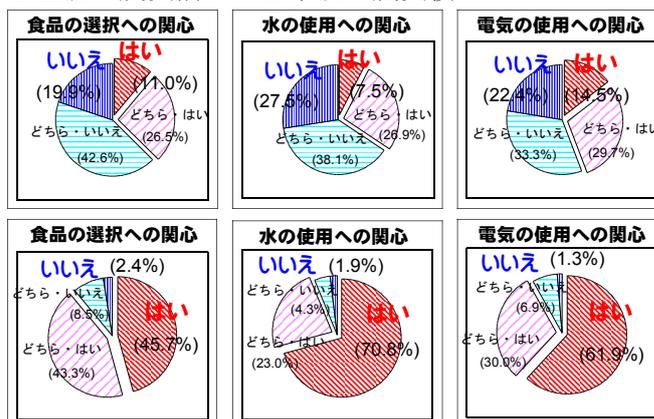
(1) 配慮すべき生徒

東日本大震災後、家族や家屋は無事であるが、原発事故による避難で、浪江町や大熊町より4名の男子生徒が転入してきた。その悲惨な思い出がトラウマとなり、精神的なストレスを抱えながらの学習とならないように、授業のねらいを説明し、生徒と十分に話し合い、常に生徒達の気持ちに寄り添った指導を心がけ、学習を進めた。

(2) 生徒の実態 (意識調査のアンケート)

○上段 震災前

○下段 震災後



震災の前後で比較すると、食の選択や摂取、水や電気の使用に対する意識は、肯定的な回答(『はい』『どちらかといえばはい』)が男女共3～4割から9割へと増えた。当たり前の感覚で生活していた生徒にとって、お金があっても、自由に食品や燃料を購入できない苦痛が生活の意識を変えたものと考えられる。

4 問題解決的な学習

(1) 震災後の生活を振り返る

生活への工夫は、水は井戸水を地域の方からいただいたり、給水所に並んだりした。トイレは、何回かに

東北関東大震災後の生活を振り返ろう	
生活の様子	意識したり、工夫したこと
<p>生活の様子</p> <p>震災後、生活は非常に大変でした。水は井戸水で、トイレは数回に一度しか使えませんでした。食料も不足し、生活は非常に大変でした。</p>	<p>意識したり、工夫したこと</p> <p>水は井戸水で、トイレは数回に一度しか使えませんでした。食料も不足し、生活は非常に大変でした。</p>
<p>生活の様子</p> <p>震災後、生活は非常に大変でした。水は井戸水で、トイレは数回に一度しか使えませんでした。食料も不足し、生活は非常に大変でした。</p>	<p>意識したり、工夫したこと</p> <p>水は井戸水で、トイレは数回に一度しか使えませんでした。食料も不足し、生活は非常に大変でした。</p>
<p>生活の様子</p> <p>震災後、生活は非常に大変でした。水は井戸水で、トイレは数回に一度しか使えませんでした。食料も不足し、生活は非常に大変でした。</p>	<p>意識したり、工夫したこと</p> <p>水は井戸水で、トイレは数回に一度しか使えませんでした。食料も不足し、生活は非常に大変でした。</p>

一度まとめて流した。感想には、いつもの当たり前のことが、すごく幸せに思い、感謝の気持ちで一杯になったと書かれていた。

(2) 現状を新聞から探る

また、新聞から学んだ内容である風評被害の対策や再生可能エネルギーについて、興味や関心を持ち、自らの課題とした生徒も見られた。



(3) 課題設定と解決、まとめ

テレビは、1時間消すだけで月に約30円、暖房中のトイレのふたを閉めるだけで約70円の節電となるなど、私達にできる具体的な内容や数値が出され、どれも実践可能な内容となった。



(4) 発表(共通理解)

各自のまとめは、冊子にして発表前に配付し、授業前に同じ課題の者同士で班編制を行い、座席を指定した。その後、学習の流れや司会者の確認を行い班ごとに各自1分間発表させた。さらに、評価項目に従って、学習プリントに評価し、班の代表を選出した。班の人数が異なるので、早く発表が終わった場合は、他の生徒から学んだことをプリントに記入し、自分のまとめとの相違点を確認させた。代表による発表の後、教師による補



自分にできることをまとめよう

★内容・発表ともに優れ、代表にふさわしい人を決めよう

評価項目	評価
◎ズバリと上手な言葉で自分の言葉で工夫をしながら分かりやすく伝えていたか。	○
◎『私たちにできること』が具体的であったか。	○
◎実践意欲を高める内容・発表であったか。	○

代表にふさわしいと思う人の名前

自分のまとめや友達の発表から
自分が継続して実践でできること

リサイクルー資源を節約する時、エコバックを再生品を環境にやさしい素材で作る。

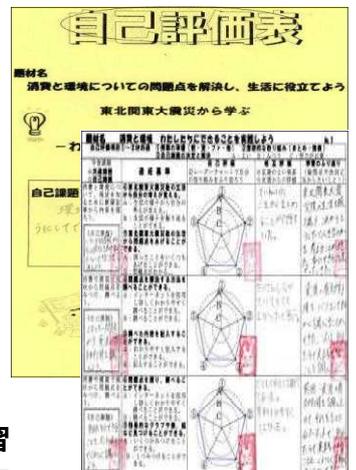
の生徒から学んだことをプリントに記入し、自分のまとめとの相違点を確認させた。代表による発表の後、教師による補

足説明と重点内容の確認をしたことで、生徒達は消費から環境まで幅広い知識を得ることができた。



5 自己評価表の活用

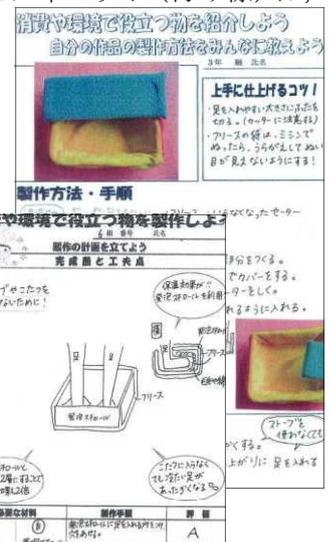
導入段階で、共通課題の確認と達成基準の説明をし、具体的な内容でこの時間内で解決できる生徒の自己課題を記入させた。終末には、レーダーチャートによる自己評価を行った。授業準備、意欲的な取り組み、自己課題の決定・解決、授業内容に応じた達成基準を評価させた。相互評価では、友達に評価してもらったり、努力していた友達を評価したりした。最後に学習の振り返りを行い、学んだことや実践できたこと、疑問に思ったことを記入させ、次の学習に生かした。



6 実践的・体験的な学習

(1) 生活に役立つ物の製作

インターネットを活用して、材料や製作方法を検索し、学習プリントに各自が工夫を加えながらまとめ、作業を進めさせた。機能性ばかりでなく、装飾性などの条件を加えることで、更にレベルの高い作品となった。消費では、食材をフェルトで作り、立体的にしたメッセージボード、環境では、節電を意識して、発泡スチロールを活用して勉強する時に足を温める物を製作した。衣服の襟を活用したティペット(付け襟)は、既製品同様に完成度の高い仕上がりがだった。でき上がった作品全てが、オリジナルなこだわりの作品である。実際に作業を進めて分かることも多く、簡単で効果的な方法を見つけることが本当の学びであると考えた。実践力の育成を図るためにも、気付かせ考えさせる時間や機会を設定し、経験を積み重ねることが大切だと実感した。





(2) 復興を願ってのまとめと発表

「あの日から1年たった、今でも生活するのに苦労をしている人達がいる。今後は、情報や周りの人に頼らず、自分で判断し、助け合いと感謝の精神で生きていきたい」という発表もあり、共感を呼んだ。

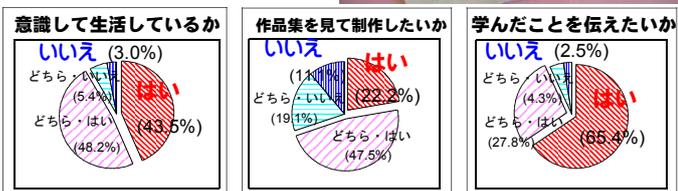


(3) 生活に役立つものを家庭や学校、地域で活用

それぞれの計画に従い、自らの作品を生かせる場所を見つけ、活用させた。まとめに活用の反省を記入することが大切であると考え、次年度の課題とした。

7 検証, 成果と課題

『今でも震災から学んだ事を意識して生活しているか』の肯定的な回答は、男女共に9割前後であった。未だに復興が進まない現状や震災から2年経った今でも震災の時のあの悲惨な思いを抱えながら生活している人達が多いことを知り、自分自身の在り方を考えた結果だと言える。全員の作品が載っている『作品集』を見て、『興味を持ち制作してみたいか』の肯定的な回答は、約7割である。今後、制作したい物が出てきた時に、この学習の流れや『学び方』の通りに実践すれば、どんな作品も製作できると確信している。『震災で学んだ事を伝えていきたいか』の肯定的な回答は、男女共に9割を超えていた。まとめの中でも、多くの生徒達が、今後も伝えていきたいと書いていた。

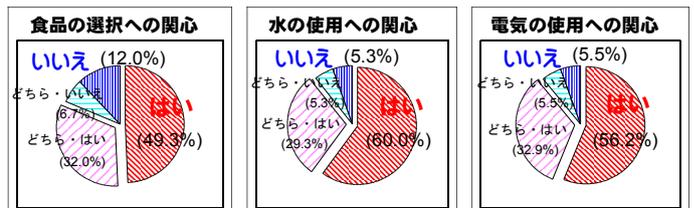


8 1年次の反省を生かした2年次の実践

1年次の取り組みでは、製作品を活用できたのか明確にならない部分があったので、生活に役立つ物の製作→家庭や学校・地域での活用→復興を願ってのまとめ→発表(共通理解)の流れに変更した。

(1) 生徒の実態

『食品の選択』での肯定的な回答は、約81%であり、同様に『水や電気の使用』においても約89%と関心が高い。



(2) 震災後の生活を振り返る

2年時に記入させた。震災後の生活の現状や工夫などの記述は、2年生であっても、3年生とほとんど変わらなかった。

(3) 現状を新聞から探る

震災から1年経ったにもかかわらず、新聞の内容に大きな違いは見られなかった。



(4) 自らの課題決定, 課題解決, まとめ, 発表

2年次の課題は、消費では、放射線による食べ物の安全性を課題(テーマ)とする生徒が多くなった。今だけでなく将来も健康でいられるのか、次の世代に対する影響はないのか、誰にとっても大きな問題であり、自ら解決しようという気持ちの高まりを感じることができた。環境では、節電やゴミの問題、防災が多かった。

(5) 自己評価表の活用

1年次同様の形式や方法で実施した。



(6) 実践的・体験的な学習

① 生活に役立つ物の製作

消費では、1年次同様に調べた内容の重要ポイントをメッセージボードに表現する作品が多かった。防災頭巾も災害時だけでなく、普段はエコバックやクッションとして使用できるように工夫されていた。それぞれの生徒達の思いや願いが『こだわり』となり、生活に役立つオリジナル作品を作り上げることができた。

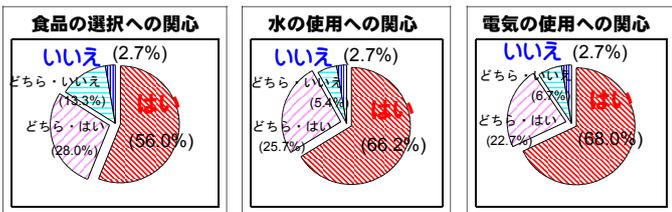


② 復興を願って、生活に役立つ物の活用とまとめ
 「災害は何年か経つと忘れられ、風化してしまうが、この学習で、また災害について考えることができた」と記入する生徒が多かった。

(7) 検証、成果と課題 (アンケート)

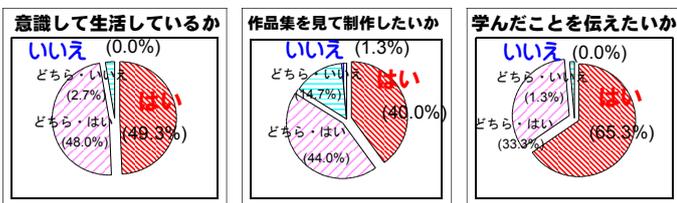
① 生活の意識について

全体的に男女共に、学習の前後で大きな変化は見られず、肯定的な回答が8～9割と高く、普段から生活を意識し実践していることが分かる。また、『いいえ』と答えた生徒が少ないなど意識の変容がみられた。



② 学習内容について

震災から2年後『学んだ事を意識して生活しているか』『震災で学んだ事を伝えたいか』の肯定的な回答は、どちらも100%に近い数値を示し、『いいえ』と答えた生徒はいなかった。また、『作品集を見て、興味を持ち制作したいか』に対する肯定的な回答は、84%と1年次の約70%よりかなり高い。課題解決を通して、製作することに自信を持った結果である。2年次の生徒の思いや願いがほぼ達成できたと言える。

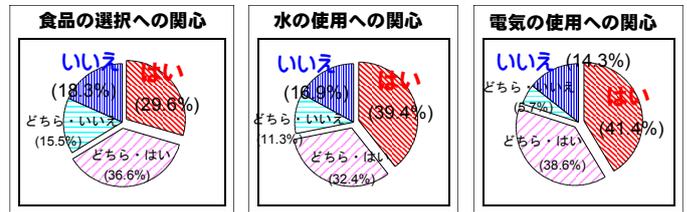


9 1年次と2年次の比較

1年次と2年次の学習に関する結果を比較すると、どの項目も2年次の方が上回っている。2年次の意識が学習前から高いことも理由として考えられるが、1年次の反省を生かして、学習内容の精選と製作時間や材料を確保し、つまずきを予想して個に応じた適切な支援ができた結果と考える。

10 3年次の学習前の生活に関する意識

震災から2年。3年次の生徒の生活への意識は、1年次や2年次の生徒と比べものにならないほど低下している。震災後の何不自由ない生活が生徒の大震災の記憶を少しずつ忘れさせているように感じる。



V 研究の成果

私達は東日本大震災から、物の大切さ、人々の強さや優しさなど、普通に何事もなく生活していたら感じられることがなかった多くの事を学んだ。また、震災時に「何もできなかった」という反省から、普段から災害への備えや対応などの心構えの重要性を痛感した。震災などの災害を含め、これから先も目まぐるしく変化する社会に主体的に対応できる生徒の育成を図るためには、問題解決的な学習や実践的・体験的な学習が有効であることを実感した。自分の課題を解決し、生活に役立つ物をテーマにそって製作したり、活用したりすることは大変難しいことであるが、「できた」という成就感や達成感が自信となり、今後の生活を創造し、自らの未来を切り開く力となる。

この3年間の大震災を通しての家庭科での学びは、生徒達に衝撃を与え、心を大きく揺さぶった。このような学習こそが、どんな社会の変化にも対応できる「生きる力」の育成につながるものと考えられる。

また、この学習で、生徒達は家族や地域の人達との「絆」、「支え合う思いやりの気持ち」を実感できた。さらに、「物の大切さ」を身をもって体験したことが、今までの意識を変え、少しでも自分のできることから実践し、社会の力になりたいという思いや願いにつながった。

VI 今後の課題

2年次のアンケートで、『震災で学んだことを伝えていきたい』という女子生徒の回答の割合が減っていることと、3年次の『学習前の生活意識』が男女共にかなり低くなっていることが課題である。

震災・原発事故前とほぼ変わらない生活を取り戻しつつある今、震災直後のあの悲惨な記憶も薄れてきている。

今なお避難が続き、仮設住宅で困難な生活をしている人も多くいる中で、自分さえよければよいという考え方が一向に無くならない。今後も家庭科教育の実践を通して、生徒達に、相手を思いやることの大切さ、生きることの大切さ、命の大切さを教え、真の「生きる力」を身に付けさせていきたい。

研究主題

ふるさとを想い、自ら学び続ける子どもをめざして

～「地域に根ざした学習対象との出会い」と「連続的な思考」を大切にしたい
総合的な学習の時間を通して～

郡山市立湖南小中学校 教諭 吉田 明史



I 研究主題設定の理由

1 今日の課題と「ふるさと」との関わりから

「ふるさと」は人のより所である。特に、自己形成が盛んな時期にある子どもにとって、「ふるさと」は大きな役割を果たすとともに、一生涯を通じて精神的な支えともなる。子どもが、今後、生涯にわたって、自分が生まれ育った「ふるさと」に愛着と誇りをもてるようにすることは大切であると考えます。

そして今日、学校教育において特に重点を置かれていることは「生きる力」の育成である。この「生きる力」を効果的に育むことができるものとして総合的な学習の時間がある。そのねらいにある「主体的な探究活動」や「生き方を考えること」の実践を充実させるためにも、子どもの体験的、問題解決的な学びが重要であり、その最も有効な素材が「ふるさと」であると考える。子どもの成長の基盤となっている「ふるさと」は自分に最も近いものであり、思いや願いが生まれやすい。その願いは学びの意欲や原動力となり、主体的な探究活動に大いに有効であると考えます。

2 「総合的な学習の時間」の有効性から

総合的な学習の時間は、子ども主体の学びによる発展的な学習活動において有効性がある。子どもが対象と関わる中で新たな気付きや思考が生じることで、新たな学びへと発展するものと考えます。そのため、課題を連続させることができ、1年間、ひいては複数年にわたり一貫して学習活動を展開していくことも可能となる。さらには、教科等の枠を超えて横断的・総合的に学習を進めることができ、子どもの思いや願いが反映され、主体的な探究活動を進めることができる。

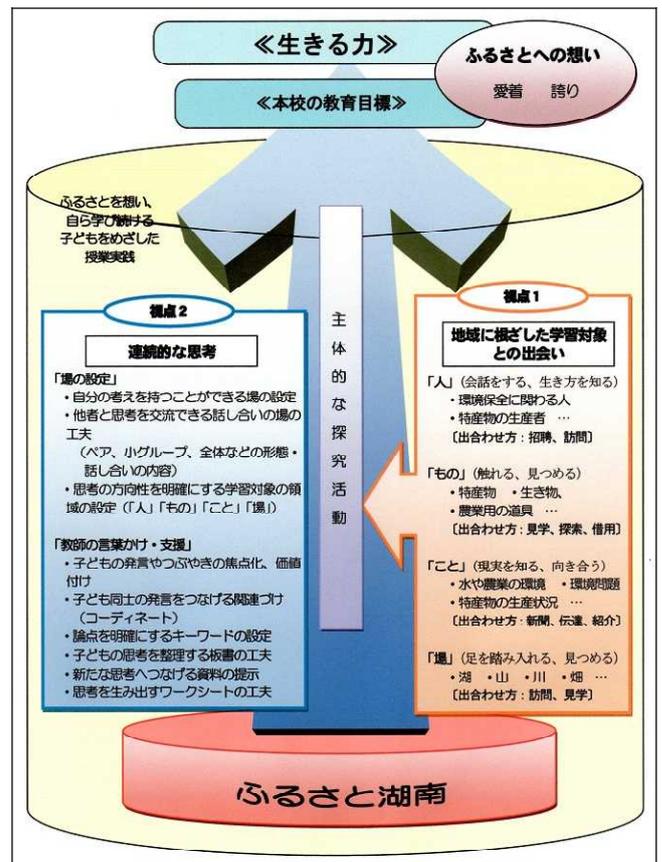
3 本校の子どもの実態と教育目標から

本校では、「ともに生き 未来を創る たくましい湖南の子」を教育目標に掲げ、『**探究**=豊かな学力』『**克服**=自信』『**共生**=他信、共信』をそなえた子どもを目指す子ども像として教育活動を進めている。この教育目標の実現のためにも、「ふるさと」を対象とした探究活動に重点を置く総合的な学習の時間の意義は大きい。特に、本校児童は震災以降、自分が住む湖南町に対する意識を高めているため、意図的に「ふるさと」を学習対象とし、児童主体の学習を進めることで、「生きる力」を育成し、ひいては「ふるさと」を愛する心を育むことにもつながると考えた。

II 研究仮説

地域に根ざした学習対象との関わりと、共に学ぶ仲間との連続的な思考を大切にしたい総合的な学習の時間を進めていくことで、ふるさとを想い自ら学び続ける子どもの育成を図ることができるであろう。

III 研究内容・方法



〈研究の構想図〉

1 研究主題に迫るための授業改善の視点

(1) 視点1「地域に根ざした学習対象との出会い」

「地域に根ざした学習対象」とは、「地域にあり続け、あるいは関わり続けながら、地域を形づくる特色となってい人……環境問題に関わる人、特産物の生産者
もの…特産物、生き物、農作業用の道具
こと…水や農業の環境、環境問題、生産状況
場……湖、川、畑、山

人、もの、こと、場、といった価値ある対象と、子どもの思考の流れや学習展開に沿いながら、直接的に関わらせる。これらを見つめ直すことで、「ふるさと」のよさを再認識したり新たに発見したりすることがで

きるとともに、様々な疑問や課題が生まれるであろう。そして、その解決に向け、子どもは思考を深めながら実践していくことができると考える。

(2) 視点2「連続的な思考」

「生きる力」の育成のためには、子どもが自ら「ふるさと」を見つめ、自ら問題を見出したり解決したりする主体的な探究活動が重要である。その主体的な学習の礎となるのが子どもの思考活動だと考える。学習の中で、子どもは課題解決に向けて思考を連続させたり、共に学ぶ仲間の思考と関連させたり、新たな思考へと発展させたりと、思考を連続させることで深まっていく。このような連続性、関連性、発展性をもった

- 「場の設定」の手立て
 - ・自分の考えを明確に持つ場の設定・確保
 - ・話し合いの形態の工夫
 - ・対象領域の設定（人・もの・こと・場）
- 「教師の言葉かけ・支援」の手立て
 - ・思考の焦点化、価値付け、関連付け
 - ・論点を明確にするキーワードの設定
 - ・思考を整理する板書の工夫
 - ・新たな思考を生み出す資料の提示

思考を「連続的な思考」として、子どもの連続的な思考を促すために、右記のよう

に、具体的に手立てを講じていく。

2 研究の充実を図るために

(1) 実践方法

今回の総合的な学習の時間では、ふるさと湖南を学習対象とした探究活動を学びの柱として学習を展開していく。具体的には、第4学年では水環境、第5学年では特産物、第6学年では人を学習対象として、長期的かつ多角的に「ふるさと」を見つめ追究していけるように、3年間に渡る大単元を構築し、子どもの「連続的な思考」を大切にして展開していくことにした。

(2) 検証方法

子どもの思いや願いは、「ふるさと」に対する愛情であるが故に純粋であり、それは形となって素直に表れやすい。そこで、教師自身も子どもと共に考えながら活動を進める中で、一人一人のその時の思いや願い、あるいはそれらの変化に目を向け、見取って活動を支援していくことにした。この実現こそ、子どもの主体的な探究活動の充実につながるものと考えている。

3年間の学びの流れ(大単元)

第4学年(平成23年度)

- ・湖南町のよさをカルタにしよう
- ・これからの計画を立てよう
- ・鬼沼の水質を調査しよう
 - ・鬼沼の水質調査
 - ・水質調査の考察

- ・湖南の水の大切さを考えよう
- ・舟津川の水質を調査しよう
 - ・舟津川の水質調査
 - ・水質調査の考察

- ・環境フォーラム「子ども交流会」
- ・新聞を作って伝えよう
- ・ドキュメンタリー映画を作ろう
- ・「こどもエコクラブ全国大会」

第5学年(平成24年度)

- ・今年度の計画を立てよう
- ・特産物調べの計画を立てよう
- ・湖南の特産物を調べよう
 - ・グループごとに調べよう
 - ・生産者を訪問しよう
 - ・新聞にまとめよう
 - ・新聞の発表会をしよう

- ・湖南のおいしい特産物を広めよう
 - ・広めるための方法を考えよう
 - ・おいしさを確かめよう
 - ・レシピ本を作ろう

第6学年(平成25年度)

- ・今年度の計画を立てよう
- ・湖南町のよさをつくってきた人々を調べよう
 - ・湖南小中学校に関わる人をグループで調べよう
 - ・中間発表会をしよう
 - ・今後の計画を立てよう
 - ・直接関わって話を聞こう
 - ・調べたことをまとめよう

- ・湖南町のよさをつくってきたお年寄りと関わろう
- ・湖南町のよさをつくってきた人たちの人物大辞典をつくろう

IV 研究の実際

1 視点1「地域に根ざした学習対象との出会い」から

(1) 地域の水環境との出会い(第4学年)

水環境に対する意識を高めた「鬼沼との出会い」

本校では、毎年第4学年で、鬼沼の水質調査を行っている。ここでは、初めから設定された活動を与えるのではなく、自ら調査の必要性を感じて調査を行い、水環境に対する課題意識をも



〈生活環境課の方から学ぶ様子〉

つことができるように、まず、前年度の調査データを子どもに見せた。すると、「水が少し汚れている。今年はどうかな。」と疑問をもち、実際に鬼沼に行って確かめることとなった。百聞は一見に如かず、五感を通して鬼沼を見つめ直し、鬼沼に対する意識を高めることができた。また、ここでは、毎年ご指導をいただいている郡山市生活環境課の方にもお世話になり、これまでの鬼沼調査の経緯についてお話いただいた。このことにより、子どもたちは、データの変位から昔の様子を考えたり、未来の様子を想像したりすることができた。そして、どうすればこれからきれいな水になるのかという疑問や、何十年後は美しい湖南町であってほしいという願いをもつきっかけとなった。

(2) 地域の特産物との出会い(第5学年)

深い願いを感じた「生産者との出会い」

「生産者へ行って話を聞いてみたい。」との願いから実施した生産者訪問。見学では、ジュンサイ、布引大根、しいたけ、蕎麦、花豆の5種類の特産物それぞれの生産者をグループごとに訪問し見学をした。実際に畑を見せてもらいながら、作り方や歴史など詳しく話を聞かせてもらった。このように多くの情報を得ることができたが、子どもたちにとって最も印象に残ったのは、生産者の思いや願いであった。この生産者の思いや願いは、子どもの胸に突き刺さり、「ふるさとを守りたい」という切実感を生んだ。生産者の生の声から、震災による現実を知り、生産の喜びや風評被害の苦しみなどを感じることができた。この出会いにより、子どもは、「生産者の願いを叶えたい」という思いをもち、今後の活動を方向付けることにつながった。



〈生産者を訪問し学ぶ様子〉

(3) 地域の人との出会い(第6学年)

支えられて生きていることを感じた「湖南小中学校に関わる人との出会い」

4月。昨年度までの学習を通して人との関わりの重要性を感じていた子どもたちは、今年度、湖南町に関わる様々な人を調べてみたいと願っていた。

この願いを大切に、湖南町に関わりの深い人を追究していくことにした。そこからさらに具体的に計画を立てるために、教師から「関わりの深い人とはどのような人か」と投げかけた。すると、子どもから「湖南小中学校と関わりのある人を調べたい」との考えが出された。全体で振り返ると、学校に関わる歌を作ってくれた人や展示物を贈ってくれた人、自分たちの学習でいろいろと教えてくれた人など、多くの人が挙げた。子どもたちは、自分が学んでいる学校に多くの人が関わり、多くの人が自分たちを支えていることを実感し、追究意欲を高めることができた。

〈調べる対象(人)〉

- ・「美しき湖南讃歌」 作曲者
- ・「美しき湖南讃歌」 作詞者
- ・湖南の民話伝承者
- ・唐人風制作継承者
- ・「ペリカンと少年」の像作者 (彫刻家)
- ・民芸品(ひょうたん) 伝承者

2 視点2「連続的な思考」から

(1) 思考の連続で構築した大単元構想の一端

① 写真で振り返ることで生じた気付き (第4学年)

「鬼沼の水質調査をしよう」から「舟津川の水質調査をしよう」へ

鬼沼の水質調査で前年度よりも汚れているという結果を得た後、汚れた原因について全体で話し合う場を設けた。近くには民家が無く、汚れの原因となる生活排水が入り込んで来ないのに、どうして汚れていくのか、考えを出し合った。

- C: 水がほとんど流れていなかった。
 C: 水が流れていなければ、たしかに汚れた水がたまって、どんどん汚れていく。
 C: だったら、水が流れていれば、水は汚れないの。
 C: 川は汚れていないんじゃない。

そこで、調査時に撮った鬼沼の写真を見せると、一人の子どもから水の流れが無かったことの気付きが出された。そして、「水が流れず淀んでいるから、どんどん汚れていっているのでは。」と仮説が立てられた。このことを確かめるため、常に水が流れている川に目を向け、近くの舟津川の調査へと課題が繋がった。

② 不満から新たな活動へ (第4学年)

「新聞を作って伝えよう」から「ドキュメンタリー映画を作ろう」へ

鬼沼と舟津川の水質調査、考察を経て、全体で水環境を大切に守っていく方法を壁新聞にまとめた。壁新聞の完成後、初めは満足したものの、壁新聞では伝わらないものが多いことに気付き不満を漏らしていた。そこで、その不満を大切に、全体での話し合いの場を設けた。「多くの人に知ってもらって、みんなで水環境を守りたい」という願いを確かめ合い、そこから、映像を通して伝えるという考えが生じた。昔は今よりどれほど湖南町の水環境は美しかったか、このまま汚れていくとどうなっていくのか、美しい水環境を守るためにはどうすればよいのかなど、映像によって伝えられるものの幅が広がることを知り、ドキュメンタリー映画を制作することになった。



〈ドキュメンタリー映像を収めたDVDパッケージ〉

③ 生産者の願いに焦点をあてた新たな課題(第5学年)

「湖南の特産物を調べよう」から「湖南のおいしい特産物を広めよう」へ

特産物の生産者訪問を通して調べたことを新聞にまとめた後、全体で発表会を行い、調べたことを伝え合った。ここでは、どのグループも「生産者の思いや願い」について強く紹介していた。このことから、発表会后、それぞれの生産者の思いや願いについて新聞に書かれた部分のみを取り上げ、改めて全体で確認した。ここでは、風評被害に関する悩み、湖南の特産物を多くの人に食べてほしい、といった願いが共通にあることを確認することができた。生産者の切実なる願いを感じた子どもたちは、「湖南の特産物の生産量が増えてたくさん売れば、湖南町はもっと元気になるかも。」との考えをもち、ここから、「湖南のおいしい特産物を広めよう」という単元に発展した。

本時の子どもの感想

風評被害なんかで、売れる、売れないが決まるのはおかしいし、食べてもいないのに文句ばかり言っている人に、おいしい湖南の特産物を食べさせてあげたいと思いました。



〈子どもたちが作ったレシピ本〉

湖南の特産物を広めるために、特産物を使った料理を考案し、レシピ本としてまとめた。

(2) 一単位時間における連続的な思考

① 疑問の共有から新たな考察へ（第4学年）

舟津川の水質調査後、全体で考察する場を設けた。ここで、一人の子から「舟津川は、周りに家がたくさんあって生活排水が入ってきやすいのに、どうしてきれいなのか。」との疑問が出された。その疑問を大切に、全体に投げかけると、パックテストの結果とは裏腹に「そんなにきれいとは感じなかった。」との声が多く上がった。そこで、写真で川の様子を全体で振り返るようにした。そこには、川底の石にぎっしりと付いている茶色い綿のようなものが写っていた。その後、全員で調べてみると、その正体はミズワタという生物であることが分かった。その性質は、水の中に含まれている汚れを栄養分として取り入れながら成長している、ということであった。このことから、水質がきれいなもの、単にミズワタが、川に流れ込んだ汚れた水をきれいにくれている、という考えに至った。



（川底の石に付いていたミズワタ）

② 共通の願いがもととなった年間計画（第5学年）

4月。その年の学習計画についての話し合い。前年度に引き続き水環境を追究の対象とすることを願う子どもと前年度とは異なる対象を望む子どもに分かれていた。そこで、それぞれの思いを語らせると、「湖南町のよさを守っていききたい」との思いを共通にもっていることを確認し合うことができた。ここで、湖南町のよさを振り返らせると、特産物に関する意見が多く出された。その中の一人から、震災による風評被害で苦しんでいる農家が多いという話が出された。この話を聞き、その後、「ぼくたちで湖南を元気にできたら…」という願いを全員でもち、「湖南町のよさを守っていききたい」という共通の願いのもと、その年は、特産物の視点からよさを追究していくことになった。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 「生きる力」の育成から見た子どもの変容

ふるさと湖南に目を向けた探究活動を学びの柱として3年間にわたって学習を進めてきたことで、第4学年では水環境、第5学年では特産物、第6学年では人を視点に、主体的な探究活動を充実させることができた。地域に根ざした学習対象との出会いから自ら課題を見つけ、仲間と話し合い、思考を深め合いながら自ら課題解決に向かう姿が多く見られ、「生きる力」の育成につながるものと確信を



（全体での話し合いの様子）

得た。そして、第4学年の末には「湖南の水環境を守っていききたい」と願い、その後第5学年、第6学年になり、「ふるさとを大切にしていきたい」と、以前にも増して「ふるさと」への想いを高めることができた。

(2) 「生きる力」の育成に向けた手立てから

① 視点1 「地域に根ざした学習対象との出会い」から

ふるさと湖南に根ざした「人」「もの」「こと」「場」それぞれの学習対象に価値を置き、直接的に関わらせてきたことで、子どもたちはみな、自分の目で見つめ、自ら課題意識をもって主体的に探究活動を進めることができた。また、その出会いにより、「ふるさとを大切に守っていききたい」という思いが子どもたちの心の根底にあり続け、学習を重ねることで深まっていく様子が、子どもたちの新聞や作文、発言等に表れていた。

② 「連続的な思考」について

「連続的な思考」に重点を置いて実践を進めていくことで、まず、教師自身が子ども一人一人の思考を大切に感じ取ろうとする意識をもつことができた。一人一人の言葉を取り上げ、全体に投げかけたりつなげたりするなど、意図的に思考を連続させることができた。このような実践を継続することにより、子どもは、自ら課題を設定し、仲間と思考を連続させながら発展的に学びを展開していくなど、総合的な学習の時間だけでなく、他教科においても主体的に学び続ける姿が多く見られるようになった。

2 今後の課題

○ 別の角度や広い視野でふるさとに迫る

第4学年から第6学年の3年間の学習の中で、ふるさと湖南に対する愛情の育成も視野に入れ、子どもの思いや願いをもとに、水環境や特産物、人といった視点で多角的に湖南町を見つめさせ探究活動に取り組みさせてきた。今後は、ふるさと湖南への想いを根底に、さらに、福祉や健康などの別の角度や、湖南町だけでなく郡山市、さらには福島県と、広い視野で「ふるさと」に迫らせていきたい。このように発展させることで、探究活動をより充実させることができ、「生きる力」の育成をさらに進めていくことができると考える。

○ 知の総合化に向けた横断的・総合的な実践

今回、思考の流れを重視するが故に他教科、他領域との関連には力点を置かなかった。実際の活動の中では、環境問題と特産物を関わらせて考えようとしていた子がいたが、大きく取り上げることができなかった。今後は、より広い視野でそれぞれの学習対象や事象を見ることができるよう、他領域や他教科と関連させ横断的に学習を展開するなど、学習対象により多角的に迫っていくことに重点を置き、知の総合化を図っていききたい。これにより、「生きる力」の育成をさらに進め、「知識基盤社会」において求められる子どもの育成にもつながるものと考えている。

研究主題

望ましい集団活動を通してのよりよい生活づくり

～SPDCAサイクルによる特別活動の充実～

田村市立美山小学校 教諭 齋藤 孝之



I 主題設定の理由

1 児童の実態

本学級6年生は、男子9名・女子10名の計19名からなり、1年生入学時からほぼ同じ成員で学級全員が協力して活動をすることができる。

しかし、固定された成員で過ごしてきたため、「どうせ、誰かがやってくれるからいいや。」といった責任感のなさや、「〇さんがやるから私もやろう」と自分で考えずに友達の行動に合わせて行動をするなど主体的に行動することが苦手である。また、「言わなくても分かってくれるだろう。」「このくらいは言ってやってもいいだろう。」という行動が目立ち、相手の立場になって考えたり、行動したりすることがなかなかできない。児童一人一人が主体的に活動し、友達や集団のがんばりを認め合って、相手の立場になって考えたり、行動したりすることができる学級に育成することが望まれる。

2 特別活動の役割と望ましい集団活動の重要性

教育活動全体で「生きる力」の育成を目指す中で、豊かな人間性や社会性の育成に直接的に機能する教育分野は、望ましい集団活動を通して展開される特別活動であると考えられる。特別活動は、個性の伸長と調和のとれた豊かな人間性を育成するとともに、学級や学校生活の基盤の形成に重要な役割を果たしている。

「望ましい集団活動を通して」とは特別活動の指導原理であり、一人一人の児童が互いのよさや可能性を認め、生かし、伸ばし合うことができるような実践的な方法によって集団活動を行ったり、望ましい集団を育成しながら個々の児童に育てたい資質や能力を育成したりするものである。

3 よりよい生活づくりの重要性

よりよい生活づくりを学級で行っていくためには、学級集団を望ましい集団にしていくための段階を経た指導と実践が必要である。学年や学期の初日となる節目となる日をどのように迎え、その後の数日間をどのように過ごすのか、「学級経営や学級活動の充実は、スタートの取り組みで、5割は決する。」と考え、計画的にどのような指導を行っていくかによって学級集団の質が変わってくると考えた。

学級集団を育て学級のよりよい生活づくりを行っていく上で実践課題として、『「理想・めあて」づくり』

(学級活動(2)「〇年生になって」)、『「組織」づくり』(学級活動(1)計画委員会・係)、『「生活・活動」づくり』(学級活動(1)集会活動)、『「協力・共通理解」づくり』の4つの実践課題は必要不可欠なものであり、計画的に実践することが重要であると考えられる。また、この4つの実践課題を計画的に円滑に実践し、児童が主体的に学級のよりよい生活づくりに取り組むためには、学級の実態に合った学級活動オリエンテーションを行って、学級会・集会活動・係活動をどのように行っていくかを指導していくことが重要であると考えた。

II 研究の構想

1 大事にしていくこと

(1) よりよい学級生活づくり

よりよい生活づくりとは、教師の適切な指導の下に、児童自らが楽しく充実した学級の生活をつくっていくことである。

- 生活上の諸問題に自らが気づき、関心をもてる
- 共同して、具体的に解決の方法を見だし、実践できる

この活動を繰り返すことで、児童一人一人に自主性や社会性、集団の一員としての自信や責任感などを育てるとともに、望ましい人間関係を築こうとする態度を形成することである。

(2) 望ましい集団活動づくり

学習指導要領解説特別活動編では、望ましい集団活動の条件として、「ア 活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通理解をもっていること」「イ 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、それを協力して実践すること」などを挙げている。この条件を満たす活動を積み重ねていき、学級の生活づくりを進めていくことで、児童によりよい人間関係を形成させていくことが重要であると考えられる。

(3) S-P-D-C-A サイクルによる自発的、自治的な活動の積み重ね

望ましい集団生活を通して学級の生活づくりを行っていくには、児童が自発的、自治的な活動の中でありのままの自分を表出し、一人一人の思いや願いを十分に実現して、自分のよさ、友達のよさを相互に知ることが欠かせないと考える。

そのために特別活動では、児童がよりよい生活にしたいという思いのもとで、自分たちの問題を自分たちで発見し (Standing), そのことについて話し合い, 自己決定 (集団決定) する (Plan)。そのことを児童に実践・実行させ, 自信をもてるようにする (Do)。そして, 自分や集団を評価し, 振り返る (Check) ことで, さらに新たな課題を発見する (Action)。そんなS-P-D-C-Aサイクルによって, 自主的で自治的な活動に取り組ませる。教師は, 児童に期待し, 要求し, そして, 児童を信じ続けること。話し合いでは寄り添い, 励ましながら, 実践・実行する場面ではその頑張りを見取って価値付けていきたい。

2 研究の内容

望ましい集団活動を通してよりよい生活づくりを行うために, 特別活動の4つの内容でS-P-D-C-Aサイクルの支援の仕方を構想し, 研究を推進していく。

(1) Standing (発起する, 立ち上がる) 活動

生活向上意欲を高めるために, Standing (発起する, 立ち上がる) 活動を充実させる支援の仕方

(2) Plan (話し合い) 活動

合意形成能力を育むために, Plan (話し合い) 活動を充実させる支援の仕方

(3) Do (実践・実行) 活動

決定したことを児童に Do (実践・実行) させ, 自信を持てるようにさせる支援の仕方

(4) Check (振り返り) 活動

自分や集団を評価し Check (振り返り) 活動を行い, 自己評価能力を高めるための支援の仕方

(5) Action (発見し改善) 活動

さらに新たな課題を Action (発見し改善) して, 課題を設定する力を高めるための支援の仕方

特別活動評価計画	
特別活動の評価は、特別活動が集団活動であると同時に実践活動を特質していることから、評価は、知識や理解よりも行動や態度における変化を定めてもらえ、教員と児童にA,B,Cの3段階で評価することは望ましくない。十分満足できる活動状況にあると判断される子どもを評価することとする。	
1 学級活動 (1) 評価計画	
評価項目	具体的な評価事項
S	<ul style="list-style-type: none"> 学級目標や学級の課題をとらえて、指導のねらいが明確になった指導計画になっているか。 児童の発達段階や学級の状況、活動経験に即した指導計画であるか。 児童の自発的、自治的な活動を助長するような努力性、機軸性のある計画であるか。
P	<ul style="list-style-type: none"> 児童の自発的、自治的な活動を伸ばすために、児童の自治的能力を伸ばすような指導方法を工夫しているか。 児童の発達段階に応じ、活動のめやすに合った指導方法になっているか。 話し合いの形式だけでなく、グループワークや発表など多様な方法を用いているか。 児童の関心、意欲、態度を高める支援がなされているか。 話し合いの場を確保し、マナー化が図られているように、全ての児童も活発に参加できるように留意工夫されているか。 朝の会・帰りの会を有効にした事前活動・学級活動コーナーの活用を重視し、議題の共有化が図られているか。
D	<ul style="list-style-type: none"> 学級をよりよく、より楽しくするために、自分たちの方で学級内の諸問題を積極的に話し合い、解決していくこととする態度を養うことができたか。 自分たちの問題に対して、原因などを正しく把握し、話し合いにより、集団としてよく話し合えるようになったか。 議題について互補し合った具体的な話し合いができ、的確な役割分担による活動を展開することができたか。 児童一人一人が学級としてのめあてをよく理解し、協力活動の意義を理解できたか。
C	<ul style="list-style-type: none"> 集団の一員としての話し合いを通して、学級集団と自分との関わりを認め、学級生活に対する見方や考え方を深め、学級をよりよく、より楽しくしようとする実践的な態度を養うことができたか。
A	<ul style="list-style-type: none"> 学級をよりよく、より楽しくするために、諸問題の解決に向けて創意工夫したり、自分のあり方を考え友達と協力したりしながら解決しようとしていたか。 学級の集団の一員として自分の役割や分組を知り、実践可能な自分なりの方法を理解しているか。(知識・理解)

【特別活動評価計画—学級活動 (1)】

3 研究計画

美山小学校の教育構想 (計画) をもとに, 特別活動全体計画・単元配当にそって実践を行っていく。

III 研究の実践

1 学級活動の実践

(1) S 学級活動オリエンテーションの実施

学級活動オリエンテーションを4月に実施し, 「話し合いの手順」「計画委員会の役割」などを確認した。

美山小学校学級活動オリエンテーション資料 高学年

「学級活動」の時間は、みんなが学級をよりよく、より楽しくするためにある、みんなの時間です。

◎ 学級活動には、次の2種類があります。

- 「話し合い活動」「集会活動」そして「係活動」を行う学級会
- 先生が中心になって、「5年生になってのめあて」「健康で安全な生活」「友だち関係」等について話し合う学級活動

※ 学級会と学級活動の予定は前週で確認しておくことと計画を立てやすいです。今回は、学級会 についてお話しします

1 「話し合い活動」開始までに行うことは?

何を する か	いつするか	だれがするか
1. 学級の課題を見つける。議題を提案する。	毎日いつでもOK	学級 全員
2. 議題の候補を決める。	毎週月曜日放課後	計画委員会
3. 議題の候補から議題を決め、みんなに経過を知らせ、賛成を得る。	毎週火曜日朝の会	計画・全員
4. 話し合いの計画を立て、知らせる	話し合い前日まで	計画委員会
5. 学級活動の時間 (話し合い活動) の時間	毎週金曜日5校時目	学級 全員
6. 話し合いで決まった活動をする。	決まった日	学級 全員
7. 活動を反省する。	朝の会や帰りの会	学級 全員

◎ こんな話し合いができるよ。

<議題例>

- みんなでできる学級の歌を作ろう
- ○○な新しい学級の歌を作ろう
- 学級が楽しくなる学級の歌を作ろう
- ○○な学級会の計画を立てよう
- ○○○で発表発表しよう
- ○○○できる学級の思い出アルバムを作ろう
- 学級本ネズミを作ろう

みんなが知っていることやみんなにおもしろいことなどを話し合えるよ。

◎ 議題を決めるポイントは

1. 学級がよりよくより楽しくなる活動か
2. 学級のみんなに関わる問題で、話し合いで解決できるか
3. おもしろい、他の教科のよまじりにならないか
4. 学校のまわりや予定をぶらさないか

○ 学級全員 提案カード、掲示板で提案しよう

○ 計画委員会 ありがとうカードで、提案に対する返事をしよう

【学級活動オリエンテーション資料 高学年】

資料が, その後の話し合いを進めるための指針となり, 児童は自主的に話し合いを進めることができた。

(2) S 計画委員会を中心にした話し合い事前活動



【計画委員会を中心にした事前の話し合い】

事前に本時で何を話し合うかを学級全員で朝の時間や学級の時間で話し合った。「マンダラート法」を使うことによって, 議題を中心に, 何を「柱」にして「事前



に何を決めておくか」「係にまかせるのは何か」を可視化して話し合うことができた。

【マンダラート法のシート】

(3) P 自主的な話し合い活動の充実



〔輪番制の計画委員会を中心に話し合いを進める〕



学級会の話し合い活動では、輪番制の計画委員会を中心に自分達で話し合いを進めていった。話し合いの経験を積む中で、司会は少数意見を生かすこと、黒板記録は短冊に意見、理由は白チョーク、質問は赤チョーク、答えは青チョークなど、見て分かる工夫をすることができるようになった。

(4) D 自発的・自治的な活動の実施



〔運動会を盛り上げる種目説明〕



〔夏休みまでを振り返る思い出づくり〕



〔5年生時の反省を生かしたボーリング大会〕

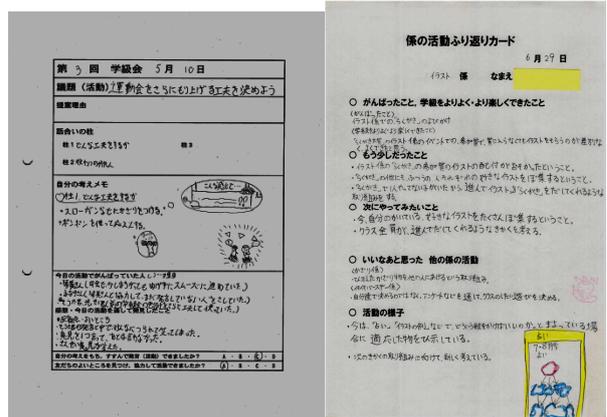


児童は話し合っただけで決めたことを自分達の手で実践していった。「児童はなすことによって学ぶ」という特別活動の指導原理の通り実践を繰り返していく中で、より自発的・自治的に活動を行うことができるようになり、よりよい生活づくりを行うことができた。

(5) C 振り返りの基準となる教師の話の充実

「教師の話」で具体的に児童の名前をあげてどこがよかったのかを児童に分かりやすく「ねらい」に照らして伝えた。また、学級全体の話し合いでの課題が何なのかを具体的に児童に伝えるようにし、次回の学級会で意識して話し合いに取り組むことでよりいっそうよりよい生活づくりをしていくことができた。

(6) C・A 多様な振り返りの実施



〔学級会ノート〕

〔係活動の振り返り〕

学級会ノートでは「がんばっていた人」と「自己評価」を行って、個人・集団の活動を振り返ることができるようになった。なすことによって学んだことを「振り返りカード」や作文などに書いて記録することで、自分の活動を振り返り成長を感じることができた。

2 児童会活動の実践

(1) S 児童会活動オリエンテーションの実施



〔パワーポイントでの説明〕

〔ネームプレートでの自己決定〕

児童会活動は委員会の所属を前年度末の3月に児童会活動オリエンテーションを行って決定した。

オリエンテーションでは「委員会活動が学校をよりよくより楽しくするためにやる」とことや「異学年活動の意義」を児童会担当が説明し、ネームプレートを使って1週間の期間をかけて所属の自己決定を行った。学期末に所属を決定したことで、新年度の初日から委員会活動を教師に頼らず、新6年生から4年生までが協力して自主的に活動を進めることができた。

(2) D・C 児童会発表会の実施



〔各委員会が全員で発表〕

〔質疑を記録して活動に生かす〕

5月と10月の年2回、児童会発表会を行い、全員で委員会のめあてや計画について発表し共通理解した。回数を重ねるごとに自分達で工夫して委員会のめあてや活動内容を発表することができた。

審査の観点及び審査総評

【審査の観点】

- (1) 研究の意図が明確で、主題が適切なものであるか。
- (2) 研究の対象が明確であるか。
- (3) 研究の計画及び内容が適切であるか。
- (4) 論旨が一貫しており、説得力があるか。
- (5) 必要な資料が精選され、整えられているか。
- (6) 結論の導き方は適切であるか。
- (7) 今後の実践に生かす手だてを講じているか。

【総 評】

論文応募要項には、「教育実践に基づく研究論文及び研究実践記録を募集することで、教職員の自主的な研究を奨励し、研修意欲や専門性を高めたい」との願いが記載されております。学校現場がまだまだ混乱している状況にもかかわらず、36点もの論文が応募されたことは意義深く、価値あることと考えます。各論文とも、目の前の課題や子どもたちの将来を見据えたものなど、教育の在り方を問う実践的な論文でした。

本年度は、昨年度以上に震災・原発問題に関する取組が多く見られました。この問題は学校現場に様々な課題を投げかけています。そのような状況だからこそ、今やるべきことは何かといった視点から、教育実践に励まれておりました。また、学校の特性を生かして全校一丸となって、教育実践に取り組まれている学校、教科教育等を通してながら教育の根幹である人間性の育成に取り組まれている学校と様々ですが、どの学校も子どもたちの「生きる力」を育成しようとする意図が読み取れました。

論文を読んだ課題ですが、一点目は一貫性です。研究論文の主題へ込めた思いは何か、そのためにどのような手立てを取ったのか、その結果どのような成果と課題が見えたのかが簡潔に記述されることが望まれます。また、それを証明する資料を、論文と対応して簡潔にまとめられることです。二点目は、データ解釈の客観性です。成果や課題が感想でなく、客観的な根拠を基に記述されることが求められます。

論文を応募されることは大変なことですが、応募という目的を持つことも学校現場の課題解決に役立つものと考えます。

平成25年度福島県教職員研究論文 応募状況

1 1次審査通過論文数 29 点 総論文数36点

2 1次審査通過論文内訳

(1) 教育事務所別

県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
6	4	6	1	7	3	2	29

(2) 学校種別

幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	計
1	17	9	0	2	29

(3) 各教科、領域等及び教育事務所別内訳

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	計	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき
国語		3				3	2				1		
社会													
算数・数学		7				7	1		3	1	2		
理科		1				1						1	
生活・総合		1	1			2		1				1	
音楽													
図画工作 美術													
体育													
英語			2			2					1		1
道徳		1				1			1				
特活・道徳		1				1	1						
特別活動		1				1		1					
生徒指導													
学校保健													
特別支援		1			2	3		1			1	1	
幼稚園	1					1	1						
技術・家庭			1			1	1						
学習指導 一般		2	4			6		1	2		2		1
学級経営													
学校経営													
合 計	1	18	8	0	2	29	6	4	6	1	7	3	2

平成25年度 福島県教職員研究論文応募者一覧

領域等	個人 団体	学校名	氏名	研究主題名
国語	団体	伊達市立掛田小学校	代表 佐藤 吉則	読解力を身に付けさせる国語科指導～自力読みのできる児童の育成～
	個人	二本松市立石井小学校	菅野 智香子	読む力を高める指導の工夫 ～「比べ読み」の授業を通して～
	団体	南会津町立館岩小学校	代表 宇内 伸一	自分の言葉で豊かに表現する子どもの育成～習得から活用へ～
算数	個人	福島市立鳥川小学校	柳澤 香里	学んだ実感の味わえる算数科の授業はどうあればよいか
	個人	福島市立野田小学校	高玉 美加	確かな学力を育てる算数科の授業づくり ～指導略案と児童の学習タイプを生かし、算数的活動の充実を図る工夫～
	団体	矢祭町立内川小学校	代表 大河原 久宗	数学的な考え方を高め表現力を育てる学習指導のあり方 ～少人数指導のよさを生かして～
	団体	矢祭町立東館小学校	代表 吉田 和賀子	数学的な思考力・表現力を育てる指導の工夫 ～算数的活動による学び合いを通して～
	団体	棚倉町立棚倉小学校	代表 木村 敏夫	「活用力を育てる学習指導」 ～基礎・基本の定着の上に、活用を促すための教師の支援の工夫～
	団体	会津若松市立湊小学校	代表 兼子 栄一	児童生徒一人一人に確かな学力を身につけさせるための算数科指導の改善 ～T・T指導による数学的な思考力・表現力の向上をめざして～
	団体	只見町立只見小学校	代表 二瓶 悦子	「自ら学び、ともに考えを深め合う児童の育成」 ～学び合いを生かして学習の定着を図る工夫～
	団体	只見町立朝日小学校	代表 荒川 文雄	学ぶ力を身につけ、ともに高め合う子どもの育成 ～基礎・基本の定着と活用のバランスよい授業をととして～
理科	個人	二本松市立石井小学校	佐久間 仁	科学的な思考力を高めるための授業はどうあればよいか ～問題解決過程の各段階に即したノート指導及び発問・指示の工夫～
道徳	グループ	福島市立鳥川小学校	上石和子 根本香子	震災後の福島を生きぬく子どもを育てる放射線教育指導1年次の挑戦 ～他とのかかわりを基盤にし、自己の生き方を考える道徳教育との関連～
	個人	伊達市立保原小学校	斎藤 恵美	児童の道徳性を育むために道徳教育推進教師ができること ～協力体制を確立し、家庭や地域と学校をつないだ4年間～
	団体	矢祭町立東館小学校	代表 吉田 和賀子	確かに自己を見つめ、より高い判断力と道徳的実践力を高める授業の工夫 ～道徳の時間の特質を活かした指導を通して～
特別活動	個人	田村市立美山小学校	斎藤 孝之	望ましい集団活動を通してのよりよい生活づくり ～SPDCAサイクルによる特別活動の充実～
技術・家庭	個人	伊達市立桃陵中学校	遠藤 範子	社会の変化に対応し、豊かな心と生活を創造する能力の育成 ～東日本大震災後、そして1年・2年…生徒達の学びと実践～
体育	個人	田村市立岩井沢小学校	中村 崇史	めあての達成を目指して主体的に運動に取り組む児童を育てる体育指導 ～教科体育及び教科外体育でのつながりある実践を通して～
英語	個人	南会津町立南会津中学校	池上 禎一	4技能の統合的能力の育成を目指して
	個人	いわき市立川部中学校	竹中 亜木子	小学校で培った「聞く・話す」力を「読む・書く」活動に生かすフォニックスの効果的な指導の工夫
総合的な学習の時間	個人	郡山市立湖南小中学校	吉田 明史	ふるさとを想い、自ら学び続ける子どもをめざして～「地域に根ざした学習対象との出会い」と「連続的な思考」を大切にしたい総合的な学習の時間を通して～
	個人	相馬市立桜丘小学校	増子 啓信	福島のこれからを生きる力の素地を養う放射線教育の在り方を探る ～総合的な学習の時間「わたしたちの故郷、相馬は今…」の実践を通して～
学校保健	個人	伊達市立五十沢小学校	吉田 絵理	児童の健康に対する意識向上と自己管理能力の育成Ⅱ ～継続的な歯科保健活動の工夫～

学習指導一般 (全般)	団体	伊達市立保原小学校	代表 佐藤 義仁	人とかわりながら課題を解決できる子どもの育成～「学び合い」を中心として～
	団体	天栄村立天栄中学校	代表 庄司 新一	自ら学び確かな学力を育むための学習活動の創造(2年次) ～個に応じた指導の工夫を通して～
	団体	田村市立滝根中学校	代表 谷川 健二	子どもの学びをもとにした授業づくり ～授業改善の日常化をととした学力向上～
	団体	矢祭町立矢祭中学校	代表 阿久津光俊	少人数教育のよさを生かし、生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせるための授業の創造
	団体	鮫川村立鮫川小学校	代表 八代 之宏	豊かに関わり合いながら共に高め合う子ども ～言語活動の充実への取り組みを通して～
	団体	南会津町立田島中学校	代表 渡部 岩男	学びの質を高め、確かな学力をはぐむ指導工夫 ～「考え」を言語化して「表す」活動を取り入れた授業の実践を通して～
	団体	南会津町立檜沢中学校	代表 渡部 早苗	自ら考え、自信をもって表現できる生徒の育成
	個人	相馬市立飯豊小学校	今野 昌樹	言語活動の充実を図り、思考力、判断力、表現力を育む学習指導はどうあればよいか～理科指導からのアプローチ～
	団体	いわき市立貝泊小・中学校	代表 高崎 康行	児童生徒の思考力、判断力、表現力を育むための具体的な指導法の研究
特別支援教育	グループ	福島県立聾学校	齋藤 成子 他4名	聾学校におけるセンター的機能充実のための実践とこれからの展望 ～関係機関との連携を大切にされた地域支援センター「みみらんど・郡山」の取組～
	個人	南会津町立館岩小学校	河原田 三春	特別支援学級における、表現する喜びをはぐむ教育活動の実践 ～交流やふれあいを生かした深まり・広がりを求める活動を通して～
	個人	福島県立相馬養護学校	田中 紀彦	児童一人一人に応じた適切な指導につなげる、地域及び校内における連携支援の充実をめざして～インクルーシブ教育システムの構築をめざした特別支援学校における連携支援体制づくりの取り組みを通して～
幼稚園教育	団体	福島市立岡山幼稚園	代表 佐藤 哲	自分らしさをのびのびと発揮できる幼稚園を目指して

おわりに

福島県教職員特選研究論文集は、県内の教育に携わっておられる教職員の優れた教育実践を奨励、普及するために発刊しており、今回で20回を数えます。

今年度は36点の応募をいただきました。応募論文からは、学習指導要領を視野に入れながら、各学校が抱える課題を的確に捉え、児童生徒の発達段階に応じた手立てを講じて育成したい資質・能力を育もうとする実践等、教師としての高い志を感じるとともに、教育の専門家としての力量を高めようとする真摯な姿勢が伝わってまいりました。

特に、入賞論文においては、確かな学力の育成、豊かな心の育成、そして、震災からの復旧・復興に積極的に児童生徒を関わらせる取組など、まさに「生き抜く力」を育成するために、適切な研究手法のもとに研究を進め、よりよい成果をあげようとする実践研究が見られました。

本論文集には、応募者全員の研究主題を掲載してありますので、今後の研究や実践の参考にしていただきたいと思います。

最後に、各学校及び教職員におかれましては、東日本大震災という未曾有の災害と幾多の困難に立ち向かいながら、目の前の児童生徒へ全身全霊で関わり、未来のふくしまを創造する人材の育成に努めていることと思います。これからも、夢と希望を持ち続け、教育のプロとしての力をさらに磨かれるようお願いするとともに、次年度も幅広い領域・校種から、積極的に御応募くださいますようお願いいたします。

平成25年度福島県教職員特選研究論文集

平成26年3月発行

編集・発行 福島県教育委員会
